

夏の日の恋 1984

84

年4月4日、ホノルル市ペリタニアストリート沿いのヒザハットで

わしはその美少女に出会った。

名前はすぐに分かった。

STEPHANIE、ヒザハットの純白のEPロン、胸元の名札に書いてある。ステファニー、か……ステファニー。なんて、この世から3cmほど浮き上がっているような、この美少女にふさわしい名前なんだ……。

彼女はパンヒザとサラダバーの皿とパイアントのパドライトをことり置き、柔らかなのに、わしの胸のどこかにちくりと刺さるような笑顔を、歌つたように「ENCORE」と言ってくるりと踵を返し、小鳥のように去っていった。

わしはまあまあ勉強ができ、まあまああの学校を出て、まあまあ建設関係の会社に就職し、土木設計の仕事をしていた。わしの親父は19のとき一月分の生活費だ

けを持って田舎から神戸に出、大きな製鋼所に4年間務めて、家を建て、ふたりの子供を育てた。

わしは親父に愛されているという実感があつたので、わしも親父のような、実直で平凡な人生を送る。人生ってそういうもんだらうと思っていた。

いや違うな、かっこつけてる。目の前のことしか、わしは考えていなかった。

24のとき、ウインドサーフィンを始め、

わしは変わり始めた。テニスに凝っていたときはそんなこと思わなかったのだが

ウインドで海に出、大海原をひとり、水平線を見ながらフリーニングしているとなぜか、自分のぜんぜん知らない場所に

ぜんぜん違う世界が広がっているのだから。そんな、切ない気持ちになるのだ

た。

わしは具体的に何ら検証もせず、そういう気分を押されるまま、3年半務めた会社を辞め、神戸の須磨の海の家みたいな

アパートに引っ越し、仕事もせず、風が吹けばウインドサーフィンをして、ぶらぶら過ごしていた。

その日々は甘くユルく焦燥に充ちたモラトリアム、人生の猶予期間だった。

9ヶ月が過ぎ、あてもないのに、2、3年、ウインドサーフィンしながら、暮らすつもりで、オアフに行くことにした。

オアフに行けば、何らかの新しい局面に

出会えるような気がした。なんの根拠もないのだが。

次の夜、わしはまたヒザハットに行った。ステファニーに、ともだちになんてくれないか、と頼むつもりだった。

和英辞書と竹村健一著「基本19語の英会話」を参考に、まずわしがこう言つ、ステファニーがもしこつ返事したらこつ答えるという数ケースの問答文例を作り暗記した。わしはそういう種類の行動力と度胸は、すこしあるのだ。

オーダーを取りに来たステファニーに、文例その①を言つと彼女はぎょっとし、2、3歩引いた。「しもた」と思つたが落胆するに早い、すかさず文例②で切り返す。が思わしくない。こらあかんと落ち込み、ヒザの味もなかったが、レジで代金を払つとき、ステファニーは意外にもこつ言つた。

「それならば次の日曜日、教会に行きましよう。朝の7時に店の前で待ち合わせして」

キリスト教には興味なかったが、もちろんわしは激しく首を振って同意した。教会になど行ったことはなかったが、とくに真つ白や真つ黒のネクタイを締めてゆく必要はない程度のことでは分かった。

日曜日、ステファニーは本当に店の前に来てくれた。古いアメ車に乗ってきた。男が運転していた。彼女の兄だった。わしはなんとか相相無く、最初のデートをやり終えたようだった。それから毎日曜日、兄妹と教会に行くようになった。

賛美歌を歌つたり、退屈な説教を聞くことは苦痛だったが、仕方ない、彼女に逢つ手段はそれしかなかったのだ。彼女はハワイ大学の2年生で、19歳だつ

た。ステファニー・ヤン。ジャパニーズ・チャイニーズ。日本人と中国人の血が混じると、不思議な女性ができる。肌に透明感があり、彼女自身はその肌の奥にいろいろに思える。瞳はかぶと虫の色をしていて、光を背に立つと耳朶が透き通って見えた。

5月6月と過ぎるうち、ステファニーはふたりで逢つてくれるようになった。

逢つのはいつもハワイ大学のキャンパスで、テニスをしたり、ときには校舎の陰で愛を語つたりした。というのには嘘で、

彼女はいつも聖書を開いてわしに読んで聞かせ、感想を求めるのだった。

わしがうわの空で、彼女の唇はかり見つけていると怒って聖書を閉じた。怒つたその表情がまた可愛い。

「ステファニーはどんな男が好きやねん」と訊くと、

「イエス様が選んで下さるわ」と彼女はまるで統一教会のようなことを言つた。

わしは若く、まだいろいろなことを諦めていなかったの、イエス様が選ぶのはどついつ男なのだろうと、真剣に考えた。

「キャンピングに行こうよ」とつぜんステファニーが歌つように言つた。

わしは激しく首を上トさせ同意の意を示したが、よく聞くとそれは彼女の信仰の

クリスチャンキャンプだった。信者同士で合宿して、信仰を深めるのだ。

キャンプ地は、ホノルルから西に2時間ほどドライブしたマカハの山奥にあつた。

なだらかな丘の、広大な芝生の、高い杉木立のなかに礼拝堂とハンガローがあつた。朝の礼拝を我慢するとあとは楽しく

つた。アルミの皿に、自分で朝食を盛り、芝生でバスケツボールやフオークダンスをしたり、犬にフリスビーを投げたりした。

自然の中のステファニーは素敵だった。彼女は芝のスロープで、コマネチみたいにくるくるトンボ返りを打つた。

干し草を積むようなトラックの荷台に乗つて、町に買い出しに出かけた。誰かが歌い出すと、荷台全員の合唱になった。

みんなわしより5つ6つ若かつたけれど、きらきら光るマカハの海を眺めながら合唱している、なんや青春映画みたいや

なあと思えて涙が出てきた。

夜のミサが始まった。壇上に、黒衣の、小柄な、太った中年の牧師が立った。

何らかの香が焚かれていた。40人ほどの若い信者たちは、軍隊の朝礼のように直立不動を崩さない。緊張の度が違つて、

明らかにいつもの礼拝ではなかった。目を瞑らねばならないようで、わしも従つた。賛美歌が3番4番と進むにつれ、

あちこちですすり泣きが始まり、やがて嗚咽になった。

牧師が名指しで少年Aに語りかける。語りかけるというよりは絶叫だ。少年Aも絶叫で応える。英語が聞き取れないが、

ラディカルな懺悔だといつことは分かる。黒衣が壇から降りてくる。信者の列を縫いながらランダムに絶叫懺悔問答をやる。

みなは目を固く閉じ賛美歌を合唱している、わしは薄目を開け歌つふりをして観察している。つぜん牧師が少年Bの額に手をあてる、少年Bは仰向けにぶつ倒

「オアフに、何しに行くの？」

そのときつきあっていたレイコに聞かれた。どう答えたか覚えていない。カッコ

つけた、へらへらなことを吹聴したのではない。84年2月25日、大阪国際空港

の人混みの中で、わしはレイコの姿ばかり探していた。レイコはさうとつ、見送

りにも来てくれなかった。

オアフでの暮らしが始まって、わしはじくじくと、レイコのことばかり考えて

いた。

わしは、たしかん患者のように床で泡を吹き、痙攣する、賛美歌の合唱が高まる、牧師は次々と信者をぶつ倒してゆく、わしは牧師がわしの額に手を当てませんようにと祈る、そのとき来たら演技でぶつ倒れるか？ 聞き直つて傲然と立ち続けるか？ 激しく迷い続けていた……。

そのキャンプを最後に、わしは教会に行くのを止めた。ステファニーとはときどき会つたが、やはり疎遠になり、さよならも言えないままわしは日本に帰つた。

そのオアフ滞在は9ヶ月に及んだ。「新しい局面との出会い」を期待したと言いたが、たしかにそれはあつた。ステファニーのことではない。現在の、フリーランスのライター・編集者という職を得たのだ。親光ヒザだったので動けず、アルバイトになるかと思つて、愛読していたウインドサーフィン専門誌に投稿したら採用され、それがきっかけとなって、以後20年間この仕事をしている。須磨とオアフの、18ヶ月間のモラトリアムには一応の意味があつたというわけだ。

翌85年の春、その、新しい仕事の、取材でオアフに行ったわしは、草加せんべいの詰め合わせを持ってステファニーの家を訪ねた。

が、彼女は留守だった。

最後にオアフに行ったのは何年だったか。そのときもペリタニアのヒザハットに行つた。

もちろんステファニーはいなかった。



photo by TAKI